

英語の比較構文：機能的・構文文法論的分析

岩崎 真哉

情報科学部 情報システム学科

(2008 年 5 月 31 日受理)

English Comparatives: A Functional and Construction Grammar Analysis

by

Shin-ya IWASAKI

Department of Information Systems, Faculty of Information Science and Technology

(Manuscript received May 31, 2008)

Abstract

This paper investigates the properties of two types of comparative constructions in English, which are described in terms of comparative deletion and comparative subdeletion. From the views of functional and construction grammar analyses, this paper argues that they are mainly captured with respect to the focus structures of comparative constructions and that these comparatives form two types of information structure; in the *than*-clause, the subject expresses old information (topic) and the auxiliary expresses focus, or the *than*-clause itself expresses new information while the correlate clause expresses old information. It is demonstrated that the construction involving comparative deletion is mainly analyzed in terms of the former information structure; the construction involving comparative subdeletion is analyzed in terms of both the information structures. It is shown that the present analysis can account for the data that could not be explained in previous studies and that it is more explanatory than alternative analyses.

キーワード; 比較構文, 削除, 部分削除, 焦点, 情報構造, 構文文法

Keyword; comparatives, deletion, subdeletion, focus, information structure, construction grammar

1. はじめに

英語の比較構文(Comparative Constructions)は、従来からさまざまなアプローチにより研究されている。

Bresnan (1973, 1975)は(1a)のような比較構文は、一種の削除変形が行われていると考え、それを比較削除(Comparative Deletion)と呼び、(1b)における削除を比較部分削除(Comparative Subdeletion)と呼んだ。

- (1) a. Bill has more books than John has.
b. Bill has more books than John has magazines.

本論文は、従来の分析でも捉えきれない比較構文に見られる容認性の違いに説明を与えることを第一の目的とするものである。

久野(1979)は、比較構文の構造を議論する中で(2)、(3)の例を挙げ、その容認性の違いについて、十分に納得いくだけの説明を与えることはまだできていないと述べている。

- (2) a. John gave more candies to Mary than he did cookies.
b. John gave more girls candies than he did boys.
(3) a.* John gave more candies to Mary than he gave cookies to her.
b.???John gave more candies to Mary than he gave cookies.
c. ??John gave more candies to Mary than he gave her cookies.

(久野1979:36)

本論文では、これらの文の容認性の違いや先行研究で示されるデータは、情報構造の観点から捉えられると主張する。

本論文は以下のように構成される。まず次節で先行研究を概観し、その問題点を指摘する。3節では、本論文の枠組みを説明する。次に4節で提案を

行い、それがどのように比較構文の容認性の違いを説明するかを示す。5節では、提示された提案が、さらに広範囲のデータを扱えることを見る。そして6節でまとめを行う。¹⁾

2. 先行研究

本節では、比較構文に対する統語的アプローチを概観し、その問題点を指摘する。

生成文法においては、省略(ellipsis)は統語表示を伴うと仮定され、その中でも Kennedy (2002)は、統語的構成体は音韻部門への入力表示から削除されると仮定する。具体的に言えば、比較構文は比較される対象の顕在的移動を伴い、部分削除が行われている比較構文は非顕在的な移動を伴うとする。この仮定に従うと、比較削除と比較部分削除は次のように説明される。(4a)の LF 表示が(4b)であるが、(4b)において D^0_C は比較される構成素の空の主要部を表している。概略、Kennedy はコピーと削除操作理論を想定し、削除は比較要素の主要部との同一性のもとに行われるとする。同様に、(5a)の LF 表示が(5b)であるが、部分削除が行われ、*tattoos* が削除される。(4a)と(5a)の違いは、前者が比較要素の顕在的移動を伴うのに対して、後者が非顕在的移動を伴うことである。

- (4) a. Michael has more scoring titles than Dennis has.
b. Michael has more scoring titles than [_{CP} [_{DP} D^0_C scoring titles] Dennis has [_{DP} D^0_C ~~scoring titles~~]]
(5) a. Michael has more scoring titles than Dennis has tattoos.
b. [Michael has more scoring titles than [_{CP} [_{DP} D^0_C [_{DP} tattoos] Dennis has [_{DP} D^0_C ~~tattoos~~]]
(Kennedy 2002:573)

このように仮定することにより、次の事実が説明される。第一に、比較構文と部分削除を伴う比較構

文は、複合名詞句制約 (Complex NP Island Constraint), Wh 島制約 (Wh-island Constraint), 付加詞制約 (Adjunct Island Constraint), 文主語制約 (Sentential Subject Constraint) に違反する。

(6) *Complex NP islands*

- a.* Michael has more scoring titles than Dennis is a guy who has.
- b.* Michael has more scoring titles than Dennis is a guy who has tattoos.

(7) *Wh-islands*

- a.* The shapes were longer than I wondered whether they would be.
- b.* The shapes were longer than I wondered whether would be thick.

(8) *Adjunct islands*

- a.* My sister drives as carefully as I avoid accidents when I drive.
- b.* My sister drives as carefully as I avoid accidents when I drive carelessly.

(9) *Sentential subjects*

- a.* There are more stars in the sky than that the eye can see is certain.
- b.* There are more stars in the sky than that the eye can see planets is certain.

(Kennedy 2002:558)

第二に、比較構文、部分削除を伴う比較構文ともに、空所が島にはならない補文に埋め込まれるのを許す。

- (10) a. Michael has more scoring titles than Kim says he has.
- b. Michael has more scoring titles than Kim says Dennis plans to get tattoos.

(ibid.:558)

第三に、比較構文・部分削除を伴う比較構文は強交差・弱交差 (strong and weak crossover) 現象を示す。

- (11) a. More Democrats_i voted than they*_{i/j} expected to vote.
- b. More Democrats_i voted than their*_{i/j} friends expected to vote.
- (12) a. More Democrats voted than they*_{i/j} expected Republicans_i to vote.
- b. More Democrats voted than their*_{i/j} friends expected Republicans_i to vote.

(ibid.:559)

第四に、比較構文は *that* 痕跡効果 (*that*-trace effects) を示すのに対して、部分削除を伴う比較構文はそれを示さない。

- (13) a. More books were published than the editor said (*that) would be.
- b. More boys flunked than I predicted (*that) would pass.
- (14) a. More books were published than the editor said (that) articles would be.
- b. More boys flunked than I predicted (that) girls would pass.

(ibid.:561)

最後に、比較構文は寄生空所 (parasitic gap) を認可するのに対して、部分削除を伴う比較構文はそれを認可しない。

- (15) a. I threw away more books than I kept without reading *e*.
- b. Jerome followed more suspects than Arthur interrogated without arresting *e*.
- (16) a.* I threw away more books than I kept magazines without reading *e*.

- b.* Jerome followed more leads than Arthur
interrogated suspects without arresting *e*.
(ibid.:561–562)

ここで、Kennedy (2003)がどのように省略に対する統語的分析を規定しているか見ておこう。

(17) *Ellipsis and Syntactic Representation*

If ellipsis involves deletion of syntactic structure, then:

- a. Elided constituents should be sensitive to syntactic constraints in general.
- b. However, since ellipsis does not require pronunciation of the omitted structure, elided constituents should be insensitive to syntactic constraints that derive from morphophonological properties of lexical items.

(Kennedy 2003:36)

(17)で述べられていることは、省略されている要素もそうでない要素も統語的制約に従うべきであるが、省略された要素は音声的に具現化されないの、形態音韻論的に定義された統語的制約にはかからない、ということである。

(17)の観点から、次の文がどのように説明されるか見てみよう。

- (18) a.* The Cubs start a more talented infield than the Sox start an outfield.
b.* Jones produced as successful a film as Smith produced a play.
- (19) a.* The Cubs start a more talented infield than [~~wh~~_{*t*}_{*i*} the Sox start *t_i* an outfield]
b.* Jones produced as successful a film as [~~wh~~_{*t*}_{*i*} Smith produced a *t_i* play]
- (20) a.* How talented_{*i*} do the Sox start an *t_i* outfield?
b.* How successful_{*i*} did Smith produce a *t_i* play?
(ibid.:44)

Kennedy and Merchant (2000)では(18)の容認不可能性は、(20)のような疑問文と同じように、左枝制約(Left Branch Constraint: LBC)の違反によって説明される。

しかしながら、Kennedy (2003)が述べているように、省略が削除を伴うという想定の下では、(21)も同様に、事実には反して容認不可能であると予測してしまう。

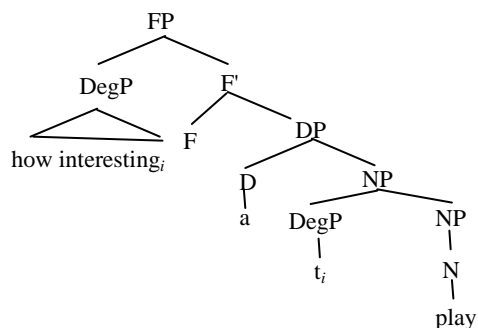
- (21) a. The Cubs start a more talented infield than the Sox (do).
b. Jones produced as successful a film as Smith (did).

(ibid.:45)

では(17)の想定の下ではどのように説明されるのであろうか。Kennedy and Merchant (2000), Kennedy (2003)は、限定修飾の抜き出しは統語素性の組合せの形態音韻論的具現化にかかる制約によって排除されると左枝制約効果を規定する。これが具体的に何を意味するか見ていこう。

Kennedy and Merchant (2000), Kennedy (2003)は、限定修飾語の構造に対して次のような構造を立てる。

- (22) a. [How interesting a play] did Brio write?
b.



(ibid.:45–46)

(22b)では、前置された程度句(DegP)は決定詞句(DP)の上の機能語(functional phrase: FP)の指定部(specifier: Spec)にあると仮定する。FPの主要部は、wh 演算子が SpecFP を移動したときに、[+wh]素性が与えられる。

Kennedy and Merchant (2000)の提案によると、語彙部門は $F^0_{[+wh]}$ 主要部を持っていないので、(19)、(20)は左枝制約違反となる。ここで、(19)、(20)が非文法的であるのは、移動にかかる制約によるものではなく、 $F^0_{[+wh]}$ は形態音韻論的に具現化されないために、PF インターフェイスの完全解釈に違反することによる、と提案される。文法的である構造では $F^0_{[+wh]}$ が消去されると提案されるが、これはFP全体を wh 演算子と随伴させて F^0 の[+wh]素性が照合されるか、もしくは、 $F^0_{[+wh]}$ を含む構成素が削除される。限定比較構文の場合は後者によって説明される。このように、左枝制約が統語表示の形態音韻的表示にかかる制約と仮定されると(21)は左枝制約の違反を回避することができる。²⁾

本論文では、比較構文における省略が音韻的要素に関係することには同意するが、比較要素との平行関係以上に統語的要素が重要な働きをするとは考えない。それは統語的分析では(2)、(3)に見られるような容認性の違いを説明することができないからである。次節では、本論文が依拠する理論的概念を提示する。³⁾

3. 理論的前提

3.1 情報構造

Takami (1996)が述べているように、一般に英語では、中立的なイントネーションで発話された場合、文の末端に向かうにしたがって新情報が提示される(久野1978, Kuno 1985, Quirk et al. 1985, Halliday 2004, Halliday and Hasan 1976)。

(23) a. Bill hit Mary.

b. I read your book.

(Takami 1996:151)

(23)において、通常、(23a)の Bill と(23b)の I は旧情報(話題)を表し、Mary と your book は新情報を表す。つまり、(23a)は Bill が誰を叩いたかを述べる文であり、(23b)は I が何を読んだかについて述べる文である。

比較構文に対して、Gergel et al. (2007)は(24a)の his mom, (24b)の than 節の he が話題を表すとしている。⁴⁾

(24) a. Manny plays the piano better than his MOM did Δ .

b. Manny claimed he played the piano better than he actually did Δ .

(Gergel et al. 2007:302)

(24)の his mom, he が話題、つまり既知の情報を表す。また、鋭アクセントが付与される要素、つまり did であるが、それが焦点を表すとする。Gergel et al. (2007)は、比較構文に対して次の構造を提案する。

(25) [correlate] than [TOPIC XP [FOCUS AUX] Δ]

(ibid.:303)

(25)において、比較構文は correlate 節と比較節である than 節から成ることが表されている。文末は高いピッチアクセントで発音される。本論文は、次節で、(25)にさらに情報構造を加えたものを提案する。

3.2 構文文法

本論文は Kay and Fillmore (1999), Zwicky (1994), Goldberg (1995), Fried and Östman (2004)に代表される構文文法(Construction Grammar)に依拠する。構文文法では、構文自体に意味があり、動詞の意味によってのみ表現全体の意味が決定され

る，という立場をとらない．また，この枠組みでは，統語論的・意味論的・音韻論的・語用論的知識が一つの文法構文の解釈に関わってくるという主張がなされる．本論文では特に，比較構文の容認性の違いを捉えるには，情報構造も他の意味構造や統語構造，音韻構造と同様に記述の中に含めるべきであると主張する．

次節では本論文の提案により比較構文がどのように分析されるか具体的に見ていく．⁵⁾

4. 分析

4.1 提案

本論文では，比較構文，部分削除を伴う比較構文に関わる情報構造を(26)のように提案する．

(26) [correlate] than [XP	[AUX] Δ]
話題	焦点
<hr/>	
旧情報	新情報

(26)は，一般的な旧から新へと向かう情報の流れに合致するものである．文全体では，correlate節の前に行けば旧情報，than節の後に行けば新情報を表し，またそのthan節の中では，XPが話題を，助動詞が新情報を担う．比較構文と部分削除を伴う比較構文の違いは，前者は同種の要素が比較されるのに対して，後者は，異種の量が比較される．言い換えると，後者は二つの事態を比べることによって抽出される量が比較されるので，前者と比較のレベルで違いがあるのである．本論文では，容認される比較構文は典型的には(26)の情報構造が満たされるべきであると考え，容認性の度合いは，次の比較構文と部分削除を伴う比較構文の表示によって捉えられる．

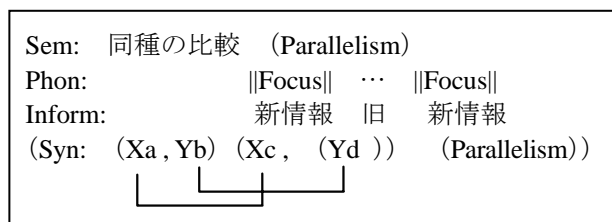


図1 比較構文

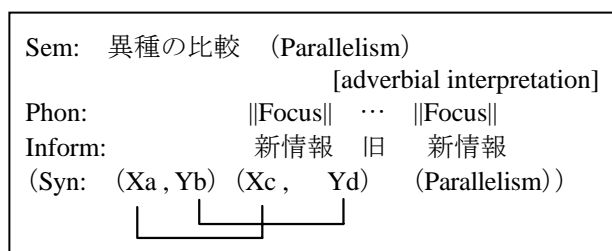


図2 部分削除を伴う比較構文

図1は比較構文を表し，図2は部分削除を伴う比較構文を表す．Sem (antics)は意味構造を，Phon (ology)は音韻構造を，Inform (ation)は情報構造を，Syn (tax)は統語構造をそれぞれ示している．図1において，Semでは，比較構文は同種の比較を表し，典型的には比較するものと比較されるものが意味的に平行関係にあることが示されている．PhonとInformは(26)を簡略化したものである．典型的には，Synにおいて表示されているように平行関係が保たれていることが望ましいが，そうでない場合もあるという意味で括弧に入れてある．一方，部分削除を伴う比較構文を表す図2では，Semには異種の量の比較と示され，典型的には副詞的解釈が可能である．図2においても，典型的には統語的に平行関係が保持されていることが望ましいが，それは周辺の要件である．

以下では，示された提案がどのように先行研究のデータを説明するか考察する．⁶⁾

4.2 先行研究のデータの説明

まず久野(1979)で提出された次のデータを見てみよう．(27)，(28)に再掲する．

(27) a. John gave more candies to Mary than he did cookies.

b. John gave more girls candies than he did boys.

(28) a.* John gave more candies to Mary than he gave cookies to her.

b. ???John gave more candies to Mary than he gave cookies.

c. ??John gave more candies to Mary than he gave her cookies.

(=2, 3)

(27a)は *cookies* が焦点情報でありこれは文末が一般的に新情報を表すという傾向に合致している。同様に、(27b)も *boys* が対比的な新情報を表し、文末にある。それに対して、(28a)は *cookies* が対比的な新情報であるが、文末には情報としては古い *to her* がある。そのため文は容認されないと説明できる。(28b)は(27a)と比べると、*than* 節にあるのは *did* か *gave* かの違いであり、(28b)は容認性が下がる。これは *gave* が *than* 節の中では焦点情報とみなされることに起因していると説明される。つまり *correlate* 節中に *gave* が一度出現しているにもかかわらず、*than* 節中では新情報となりうるために矛盾が生じ容認性が低くなると考えられる。同様に、(28c)でも *gave her* が古い情報であるにもかかわらず、*than* 節の中では新情報となりうるために容認性が低いと説明される。しかし、それが(28a)よりは容認性が低く、(28b)よりは容認性が高いのは、*cookies* が文末にあり、文全体の情報構造に合致しているためであろう。言い換えると、*correlate* 節に合わせて *than* 節を与格構造にすると古い情報である *to her* が文末に来ることになり、情報構造としては容認性が下がることになる。したがって、*correlate* 節が与格構造、*than* 節が二重目的語構文という違いがあっても(28c)は(28a)よりは容認性が高くなると説明される。

次に、Kennedy (2003)によって提出された例文を考察しよう。

(29) a. Michael has more scoring titles than Dennis has. (= 4a)

b. Michael has more scoring titles than Dennis has tattoos. (=5a)

(30) a.* The Cubs start a more talented infield than the Sox start an outfield.

b. The Sox start a more talented infield than they do an outfield.

c. The Cubs start a more talented infield than the Sox (do).

d. The Cubs start a more talented infield than the Sox do an outfield.

(= 18)

(29a)が同種の量の比較、(29b)が異種の量の比較であるが、前者では *Dennis* が対比的な話題となり、後者は入墨が対比的な新情報に対応する。これは(26)に提示された構造に適合する。では(30)はどうだろうか。(30a-d)を見ると、*than* 節に動詞 *start* がある場合のみ文が容認されることがわかる。この事実は本論文では次のように分析される。上述したように、*than* 節中の助動詞は焦点要素であると規定した。しかし、*correlate* 節と同じ動詞が *than* 節中にある場合は、それが旧情報を表すので焦点要素にはなりえない。これは次の Merchant (2001)の記述からもうかがえる。

(31) Abby sang her hymn louder than BEN sang.

(Merchant 2001:15)

(31)において、大文字で書かれている *Ben* は本論文での話題(特に対比的な話題 ; *contrastive topic*)に対応し、*sang* が斜字体で書かれているのはそれがアクセントにおいて弱化されうることを表してい

る。本論文の提案によれば、(30a)において、*than* 節の *start* が焦点となるべきであるが、*start* は旧情報であるため焦点とはなりえず、正しく本論文の提案により排除できる。(31)においては、*than* 節中にも *correlate* 節と同じ動詞である *sang* があるが、弱化が可能であるので容認されると考えられる。⁷⁾

興味深いことに、本論文の提案により次のデータが説明できる。*Pinkham* (1985)によれば、部分削除を伴う比較構文では比較部分は副詞的解釈を持ちうると指摘されている。

- (32) a. They make better police dogs than they make pets.
b. They make police dogs better than they make pets.
- (33) a. He makes a better soufflé than he does an omelet.
b. He makes a soufflé better than he does an omelet.
- (34) a. She writes better short stories than she does poems.
b. She writes short stories better than she does poems.

(Pinkham 1985: 35)

- (35) a. He writes better short stories than he does poems.
b.* He reads better short stories than he does poems.
- (36) a.* They sell better shirts than they do ties.
b. They make better shirts than they do ties.

(ibid.: 36–37)

ここで注意すべきは、容認されている文は *Pinkham* が指摘するように、創造動詞 (*creative verbs*) をとっており、目的語がいわゆる結果の目的語 (*resultant objects*) であることである。具体的に言えば、(32)では何らかの方法でより優れた警察犬が

「作られた」のであり、(33)ではよりすばらしいスフレができたのであり、(34)では「彼女」は書いた詩よりすばらしい短編小説ができたのである。これらはそれぞれ(b)に対応するような副詞的解釈をもつ。*Quirk et al.* (1985)に指摘されていることであるが、結果の目的語には副詞的に解釈されるものがある。

一方で、文が非文法的である場合は、目的語の副詞的解釈が不可能である。

- (37) a.* She bought a prettier dress than she bought a shirt.
b.# She bought a dress more prettily than she bought a shirt.
- (38) a.* He has a more expensive car than he has a house.
b.# He has a car in a more expensive way than he has a house.

(ibid.)

(37)では動詞が *buy* であり、(38)では *have* である。目的語が副詞的解釈を持たないのは、動詞が創造動詞ではないからであると考えられる。このことは次の例からも示される。

- (39) a.* He reads better short stories than he does poems.
b.* They sell better shirts than they do ties.
c. They make better shirts than they do ties.

(ibid.: 36–37)

(39c)の動詞 *make* は創造動詞であるために副詞的解釈が可能となり容認されるが、(39a, b)のように、動詞が *read* や *sell* の場合は創造動詞ではないために目的語の副詞的解釈が不可能となり容認されないのである。

さらに、本論文の提案は、以下の比較構文と部分削除を伴う比較構文の特徴を捉えることができる。

第一に、比較構文と部分削除を伴う比較構文は、上述したように、複合名詞句制約、Wh 島制約、付加詞制約、文主語制約に違反すると先行研究によって指摘された。

(40) *Complex NP islands*

- a.* Michael has more scoring titles than Dennis is a guy who has.
b.* Michael has more scoring titles than Dennis is a guy who has tattoos.

(41) *Wh-islands*

- a.* The shapes were longer than I wondered whether they would be.
b.* The shapes were longer than I wondered whether would be thick.

(42) *Adjunct islands*

- a.* My sister drives as carefully as I avoid accidents when I drive.
b.* My sister drives as carefully as I avoid accidents when I drive carelessly.

(43) *Sentential subjects*

- a.* There are more stars in the sky than that the eye can see is certain.
b.* There are more stars in the sky than that the eye can see planets is certain.

(= 6-9)

本分析では、(40)から(43)の文は、次のように説明される。(40)では、*than* 節が(26)の構造をとらない、つまり、焦点構造の中に新情報になりうる要素 *a guy* があるために文が容認されないと考えられる。同様な説明が Wh 島制約、付加詞制約、文主語制約違反に対しても可能である。*than* 節中に Wh 節、付加詞節、文主語がある場合、比較の焦点構造内にさらなる新情報が存在することになり、(26)の構造に合致せず文が容認されない、と説明することが可能である。

第二に、比較構文、部分削除を伴う比較構文ともに、空所が島にはならない補文に埋め込まれうると指摘された。

- (44) a. Michael has more scoring titles than Kim says he has.
b. Michael has more scoring titles than Kim says Dennis plans to get tattoos.

(= 10)

(44a, b)において、両者ともに *than* 節は(26)の構造をとることに注意してほしい。*Kim says* は挿入的要素であるために別の情報構造をつくる。よって(44a)では *he has* が、(44b)では *Dennis plans to get tattoos* が(26)の構造に合致しているので、文は容認されると説明される。⁸⁾

第三に、比較構文は *that* 痕跡効果を示すのに対して、部分削除を伴う比較構文はそれを示さないと指摘された。

- (45) a. More books were published than the editor said (*that) would be.
b. More boys flunked than I predicted (*that) would pass.
(46) a. More books were published than the editor said (that) articles would be.
b. More boys flunked than I predicted (that) girls would pass.

(= 13, 14)

(45)、(46)の文も本論文での比較の焦点による分析で説明されうる。(45)において、*that* がない場合は文が容認されるが、この場合、動詞句が連続することにより焦点構造が保持されるため容認される、と説明される。一方、部分削除を伴う比較構文では、*that* があってもなくても焦点構造が保持される

ので文が容認されると説明される。このことは次の文からも例証される。

- (47) a. I wrote more books than I estimated (*that) ___ would be written.
 b. I wrote more books than I estimated (that) the entire department would write ___ .
 c. I wrote more books than I estimated /ʌ/?th't would be written.
 d. √I wrote more books than I estimated that for all intents and purposes would be written.
 e. √/?I wrote more books than I estimated that'd be written.

(Kandybowicz 2006)

(47a, b)は、that 痕跡効果の観点から説明された文である。(47c)では、that が縮約され、(47e)では that の後にある would が縮約され、それぞれ that, would が縮約されない場合よりも文の容認性が上がっている。これらの事実も本論文の分析による比較の焦点の観点から説明される。つまり、that の縮約、あるいは would の縮約により、than 節中の動詞句が結合し、(26)の構造と合致することになり、文が容認されると考えられる。(47d)に関しては、for all intents and purposes が挿入されているが、それが話題の働きをすることになり、結果、(26)の構造をとることになり、文が容認されると説明される。⁹⁾

最後に、比較構文が寄生空所を認可するのに対して、部分削除を伴う比較構文は認可しない、という指摘を考察する。

- (48) a. I threw away more books than I kept without reading *e*.
 b. Jerome followed more suspects than Arthur interrogated without arresting *e*.
 (49) a. *I threw away more books than I kept magazines without reading *e*.

- b. *Jerome followed more leads than Arthur interrogated suspects without arresting *e*.

(= 15, 16)

(48a, b)それぞれ without の前に空所があると考えられているが、than 節中の動詞句は比較の焦点構造をなしている。それに対して、(49a, b)では、それぞれ kept, interrogated の後ろに空所があるとされ、それらの文は容認されない。これは、(49a)では magazines が、(49 b)では suspects が than 節中にあるため、寄生空所が認可されないためであると考えられる。また、寄生空所独自の問題も関わっていると考えられる。

5. さらなるデータの説明

本節では、本論文で示された分析が、幅広く比較構文に関するデータを説明できることを示す。¹⁰⁾

- (50) a. John serves turnips to his guests RAW more often than he does COOKED.
 b. John serves TURNIPS to his guests raw more often than he does CARROTS.
 c. John serves TURNIPS to his guests RAW more often than he does CARROTS COOKED.
 d. John serves TURNIPS to his GUESTS RAW more often than he does CARROTS to his RELATIVES COOKED.
 e. John serves turnips to his GUESTS RAW more often than he does to his RELATIVES COOKED.
 f. ??John serves turnips to his GUESTS raw more often than he does to his RELATIVES.
 g. ??John serves TURNIPS to his GUESTS raw more often than he does CARROTS to his RELATIVES.

(Bowers 1998)

(50a-e)に比べると(50f, g)の容認性は低いと判断される。これはどのように説明されるであろうか。まず(50f, g)において気づくことは、*raw* に対比強勢が置かれていないことである。(50a-e)の例文の中で *raw* に対比強勢が置かれていないのは、(50b)だけである。そこで(50b)と(50f, g)の違いは何であるか考えてみると、(50f, g)には *than* 節に対比強勢が置かれた前置詞句の *to his relatives* があるのに対して、(50b)にはないのに気づく。本論文では助動詞は焦点構造を形成すると提案した。したがって、*than* 節中の前置詞句は、動詞句と別の焦点構造を形成し、目的語と前置詞句の間に情報構造の境界が存在することになる。この境界が *correlate* 節と *than* 節の情報構造的類似性を要求すると考えられる。つまり、*correlate* 節において文末に対比強勢がある方がその要素が情報的に新しいことになり、その構造が *than* 節の情報構造と一致するのである。これは次の例文からもうかがえる。

- (51) a. John serves turnips *raw* to his GUESTS more often than he does to his RELATIVES.
 b. John serves TURNIPS *raw* to his GUESTS more often than he does CARROTS to his RELATIVES.
 (ibid.)

(51a, b)では対比強勢のない *raw* が *turnips* の後ろに生起し、文が容認されている。これは *correlate* 節において対比強勢がある前置詞句が文末にあるという情報構造と、*than* 節中の情報構造が一致しているために容認されると説明される。このように上記の例文の容認性の違いは、本論文の提案によって捉えられるのである。

さらに、本論文の提案は、次のような文が容認されうることも予測することが可能である。

- (52) # Dick supports George more than Joe, Al.
 (Kehler 2002:93)
 (53) a.# Sue was defended by John more competently than Bob did. [defend Sue]
 b.# Sue introduced John to everyone more quickly than Bill was. [introduced to everyone]
 (ibid.:60)
 (54) a. Robin speaks French better than Leslie, German.
 b. ?Robin thinks that it is harder to speak French than Leslie, German.
 c. ?Robin thinks that it is more fun to speak French than Leslie, German.
 d. Robin tried harder to learn French than Leslie, German.
 e. Robin no more speaks French than Leslie, German.
 (Culicover and Jackendoff 2005:278)

本論文の提案では、(26)に示されているように、*than* 節によって新情報として対比的新情報が示されれば容認されることになる。(52)では *than* 節中に動詞句はないが、音声的に Joe と Al が示され、「Joe が Al をサポートする以上に」というように、話題となる要素があり、焦点となる比較対象が明らかであるので、周辺的ではあるが、(52)は容認される、と説明される。(53a, b)では、*correlate* 節と *than* 節の統語的平行性が保たれてはいないが、対比的新情報が示されているのでこれらの文を容認する母語話者もいる、と説明される。(54)の例文も同様に、(54b, c)のように *that* 節があるとわずかに容認性が下がるものの、対比的新情報があれば文は容認されると言える。

これまでの本論での議論で明らかのように、対比的新情報が明確にされれば比較構文は容認される、と予測される。この予測は、次の Bowers (1998)によって指摘された事実と合致する。

- (55) a. JOHN gives money to his SISTER more often
than SAM does to his BROTHER.
b. MARY leaves books on the table more often
than SUE does on the DRESSER.

(Bowers 1998)

Bowers (1998)によれば, (55)のように, 比較対象の語に対比強勢があると文の容認性が上がることである。この事実は, 本論文で繰り返し述べてきたように, 対比強勢により新情報が明確になれば比較構文は容認される, という主張に合致するのである。

最後に, 本論文の提案が多重比較構文, 前置詞句が関係する比較構文の特徴も説明することができることを見る。

- (56) a.* John gave more girls more dolls than he had
given.
b. John gave more girls more dolls than he had
given boys pencils.

(Corver 1993)

- (57) a. More dogs ate more rats than cats ate mice.
b.* Fewer dogs ate more rats than cats ate mice.

(Izvorski 1995)

- (58) a. Jones acts in films more often than she does __
[pp in plays].
b. Pico was working on his novel at the same time
than I was __ [pp on my play].

- (59) a.* Jones acts in better films than she does in plays.
b.* Pico was working on a more interesting novel
than I was on a play.

- (60) a. Jones acts in better films now than she used to.
b. Pico was working on a more interesting novel
than I was.

(Kennedy and Merchant 2000:135)

(56b), (57a)に見られるように, 2つ以上の要素が同時に比較される文は多重比較構文と呼ばれる。

Corver (1993)は, 多重比較構文は(56a)のように比較構文では認められず, 部分削除を伴う比較構文では認められると指摘した。しかし, Izvorski (1995)が示すように, 部分削除を伴う比較構文でも多重比較構文が認められないものがある。この事実も本論文の比較の焦点の分析により説明される。つまり, (56a)の *correlate* 節では *more girls* と *more dolls* という新情報が2要素あるのに対して, *than* 節ではそれがないのである。一方, (56b)では焦点構造に新情報が2要素あり, *correlate* 節と対応するために文が容認される。同様に, (57a)では同じ「多さ」を比較するということから新情報は1つであるが, (57b)では「多さ」と「少なさ」の比較が *correlate* 節に示されているので2要素の新情報の提示となり, *than* 節もそれに平行的であるために2要素の新情報が提示されるべきであるがそうではないために文が容認されないとと言える。

(58-60)は前置詞句を伴う比較構文である。(59)に見られるように, 比較される要素が前置詞句にある場合は容認されない。一方, (60)が示すように, *than* 節に前置詞句がない場合は, 文は容認される。この事実は本論文では予測可能である。なぜならば, 本論文では焦点要素は助動詞にあると主張したからである。したがって, 本論文は比較される要素が前置詞句にある(59)を正しく排除することができるのである。

6. むすび

本論文では, 英語の比較構文と部分削除を伴う比較構文を情報構造の観点から分析し, それぞれの構文を提示した。特に, *than* 節において, 比較構文に対しては, 助動詞が焦点情報を担い, 部分削除を伴う比較構文では, さらに比べられる異なる種類の量が新情報を担うと主張した。以上の主

張と提示された構文により、当該の構文の容認可能性の違いが説明されることを示した。

- 1) 本論文では、便宜上、従来からの研究で使われるものと同じ意味で「削除」をいう語を使っていく。
- 2) Blutner et al. (2006) は、Kennedy (2000) の最適性理論 (Optimality Theory) による比較構文の分析は、1つの言語に対して2つの別々の文法を想定する必要がある、また、形式と意味の区別をあいまいにってしまう、という問題点があると指摘している。
- 3) 他の統語的分析に目を向けると、Corver (1993)は空範疇原理 (Empty Category Principle) の観点から当該の構文を分析している。しかし Corver の分析では、比較構文、部分削除を伴う比較構文ともに Wh 疑問文に類似するという共通点を説明することができない。
- 4) (24)において、大文字は高いトーンのピッチアクセントの付与を表し、鋭アクセントは第二強勢を示す。
- 5) 構文文法の中においても、構文の定義には研究者によって違いが見られる。本論文では複合構造をとれば構文とみなす Langacker (1987, 1991, 1999, 2003)の立場をとる。
- 6) 省略・削除現象に対する機能的分析としては、久野 (1979), Kuno (1985, 1995), Takami (1996), 久野・高見 (2007), 岡田 (2002)がある。
- 7) (29b)において、than 節中に旧情報を表す has があるが、Chafe (1994)には所有を表す have は弱化されうる、という記述がある。
- 8) 比較構文・部分削除を伴う比較構文が強交差・弱交差現象を示す、という指摘に対しては、本論文の提案以外の要素が関わっていると考えられるため、ここでは取り上げない。
- 9) Kandybowicz (2006)は比較構文における that

痕跡効果を音調単位の観点から分析している。それによれば、that がある場合は、その that の前に音韻的境界があり文が容認されないのに対して、that がない場合は音韻的境界が存在せず、文が一つの音調単位を形成し、文が容認される、とするものである。本論文の分析は Kandybowicz (2006)の分析を否定するものではないが、Kandybowicz (2006)はなぜ音韻的境界が存在すると文が容認されないのかに関しては説明していない。

- 10) 例文(50)における大文字は、Bowers (1998)の表記に従い、対比強勢を表す。

【参考文献】

- Blutner, Reinhard, Helen de Hoop, and Petra Hendriks; *Optimal Communication*, Stanford: CSLI Publications, (2006).
- Bowers, John; "On Pseudogapping," unpublished paper, (1998).
- Bresnan, Joan; "Syntax of the Comparative Clause Construction in English," *Linguistic Inquiry* 4, 275—343, (1973).
- Bresnan, Joan; "Comparative Deletion and Constraints on Transformations," *Linguistic Analysis* 1, 25—74, (1975).
- Chafe, Wallace (1994) *Discourse, Consciousness, and Time: the Flow and Displacement of Conscious Experience in Speaking and Writing*, Chicago: University of Chicago Press.
- Corver, Norbert; "A Note on Subcomparatives," *Linguistic Inquiry* 24, 773—81, (1993).
- Culicover, Peter W. and Ray Jackendoff; *Simpler Syntax*, Oxford: Oxford University Press, (2005).
- Fried, Mirjam, Jan-Ola Östman; *Construction Grammar in a Cross-Language Perspective*, Amsterdam: John Benjamins, (2004).
- Gergel, Remus, Kirsten Gergel, Susanne Winkler;

- “Ellipsis and Inversion,” in Kerstin Schwabe, Susanne Winkler (eds.) *On Information Structure, Meaning and Form: Generalizations across Languages*, 301–322, Amsterdam: John Benjamins, (2007).
- Goldberg, Adele E.; *Constructions: A Construction Grammar Approach to Argument Structure*. Chicago: University of Chicago Press, (1995)
- Grimshaw, Jane; “Subdeletion,” *Linguistic Inquiry* 18, 659–669, (1987).
- Halliday, M.A.K. and Ruqaiya Hasan; *Cohesion in English*, London: Longman, (1976).
- Halliday, M.A.K.; *An Introduction to Functional Grammar*, revised by Christian M.I.M. Matthiessen, 3rd ed. London: Arnold, (2004).
- Izvorski, Roumyana; “A Solution to the Subcomparative Paradox,” in José Camacho, Lina Choueiri and Maki Watanabe (eds.), *Proceedings of WCCFL* 14, 203–219 Stanford: CSLI Publications, (1995).
- Kandybowicz, Jason; “Comp-trace Effects Explained Away,” *Proceedings of WCCFL* 25, 220–228, (2006).
- Kay, Paul and Charles J. Fillmore; “Grammatical Constructions and Linguistic Generalizations: *The What’s X doing Y? Construction*, *Language* 75, 1–33, (1999).
- Kehler, Andrew; *Coherence, Reference, and the Theory of Grammar*, Stanford: CSLI Publications, (2002).
- Kennedy, Christopher, and Jason Merchant; “Attributive Comparative Deletion,” *Natural Language and Linguistic Theory* 18, 89–146, (2000).
- Kennedy, Christopher; “Comparative Deletion and Optimality in Syntax,” *Natural Language and Linguistic Theory* 20, 553–621, (2002).
- Kennedy, Christopher; “Ellipsis and Syntactic Representation,” Kerstin Schwabe and Susanne Winkler (eds.) *The Interfaces: Deriving and Interpreting Omitted Structures*, 29–54, Amsterdam: John Benjamins, (2003).
- 久野暉; 『談話の文法』 東京: 大修館書店, (1978).
- 久野暉; 「比較構文の構造」『英語と日本語と: 林栄一教授還暦記念論文集』 林栄一教授還暦記念論文集刊行委員会(編), 11–39, 東京: くろしお出版, (1979).
- Kuno, Susumu; “Principles of Discourse Deletion: Case Studies from English, Russian and Japanese,” *Journal of Semantics* 1, 61–93, (1985).
- Kuno, Susumu; “Null Elements in Parallel Structures in Japanese,” in Reiko Mazuka and Noriko Nagai (eds.) *Japanese Sentence Processing*, 209–233, Hillsdale: Lawrence Erlbaum Associates, (1995).
- 久野暉・高見健一; 『英語の構文とその意味: 生成文法と機能的構文論』 東京: 開拓社, (2007).
- Langacker, Ronald W.; *Foundations of Cognitive Grammar. Vol. I. Theoretical Prerequisites*, Stanford: Stanford University Press; (1987).
- Langacker, Ronald W.; *Concept, Image, and Symbol: The Cognitive Basis of Grammar*, Berlin: Mouton de Gruyter, (1990).
- Langacker, Ronald W.; *Foundations of Cognitive Grammar. Vol. II. Descriptive Application*. Stanford: Stanford University Press. (1991).
- Langacker, Ronald W.; *Grammar and Conceptualization*, Berlin Mouton de Gruyter, (1999).
- Langacker, Ronald W.; “Constructions in Cognitive Grammar,” *English Linguistics* 20, 41–83, (2003).
- Merchant, Jason; *The Syntax of Silence: Sluicing, Islands, and the Theory of Ellipsis*, Oxford: Oxford University Press, (2001).
- 岡田禎之; 『現代英語の等位構造: その形式と意味機能』 吹田: 大阪大学出版会. (2002)
- Pinkham, Jessie E.; *The Formation of Comparative Clauses in French and English*, New York: Garland, (1985).

- Randolph Quirk, Jan Svartvik, Geoffrey Leech, Sidney Greenbaum; *A Comprehensive Grammar of the English Language*, London; Longman, (1985).
- Takami, Ken-ichi; “Antecedent-Contained Deletion and Focus,” *English Linguistics* 13, 140–168, (1996).
- 吉本真由美; 「空演算子移動とLeft Branch Condition – 比較構文の謎を解明する」 *JELS* 25, 295–304, 東京: (2008).
- Zwicky, Arnold M.; “Dealing out Meaning: Fundamentals of Syntactic Constructions,” *BLS* 20, 611–25, (1994).